

# 「バッハ《ヨハネ受難曲》の魅力」について

バッハ好きを悩ませる問題がある。「あなたは《マタイ受難曲》が好きか、《ヨハネ受難曲》が好きか」という問いである。すでにそれぞれの受難曲の基礎となっている新約聖書の「マタイ伝」と「ヨハネ伝」が性格を異にしているが、両者は音楽的にも、またバッハの創作活動における位置づけにおいても異なっている。さらに《マタイ》には初期稿と後期稿、《ヨハネ》に至っては4つないし5つの異稿が存在するから、話はさらに複雑だ。

音楽学者として長年バッハを研究し、また明治学院バッハ・アカデミー芸術監督として、両者とも様々な稿を指揮してきた経験をもとに、改めて「《ヨハネ受難曲》の魅力」について考えてみたい。



【講演会 講師】  
樋口 隆一  
(明治学院大学教授・  
音楽学者・指揮者)

専門領域はバッハとシェーンベルクを中心とする西洋音楽史。音楽学研究、指揮、音楽評論と、幅広く活躍している。  
シュトゥットガルト聖マリア教会代理合唱長、ゲッティンゲン・バッハ研究所客員研究員を歴任。現在は、明治学院大学芸術学科教授。  
『バッハ』（新潮文庫）、『バッハ・カンタータ研究』（音楽之友社）、『バッハ探究』（春秋社）、『バッハの四季』（平凡社ライブラリー）、『バッハから広がる世界』（春秋社）、『バッハの風景』（小学館）など著書多数。

## 三澤バッハ・サウンド

バッハの受難曲は、どんなオペラよりもドラマチックだ。この中には、オリジナル楽器や古楽唱法の限界を越えた表現力が内包されているが、同時にバロックの様式感の中で作曲されている。これを実現するためには“古楽”の枠の中では無理であるし、かといって現代のオペラのテクニックをそのまま持ってきても場違いなのだ。ドラマチックとオペラチックを混同してはいけない。オペラの世界に長年身を投じてきた僕は、誰よりもオペラという様式の限界を知っている。バッハの受難曲の劇性は、あらゆるオペラの上に燦然と輝いている。だから、どこにもない受難曲の演奏をするために、僕は東京バロック・スコラーズを立ち上げた。とはいえ、創立以来意図的に受難曲を避けてきた。何故か？まずは僕のイメージするバッハの理想的な歌唱法と様式感を身につけるためであった。機は熟した。僕たちはいよいよ受難曲に向かう。みなさんがここで耳にするのは、これまでに聴いたことのないバッハの演奏スタイルだ。ドラマチックでバロック的な三澤バッハ・サウンドがここに開花する。



【指揮者】  
三澤 洋史

国立音楽大学声楽家卒業後、指揮に転向。1984年ベルリン芸術大学指揮科を首席で卒業。2001年9月から新国立劇場合唱団指揮者として新国立劇場の全公演に関わっている。1999年より2003年まではパイロイト音楽祭に祝祭合唱団の指導スタッフの一員として活躍。バッハには深く傾斜しており、「21世紀のバッハ」を追及するために2006年1月、「東京バロック・スコラーズ」を立ち上げ、音楽監督に就任。これを核に「今」を生きる人と音楽の輪を広げている。



福音史家・テノール：畑 儀文



イエス：大森 一英



ソプラノ：藤崎 美苗



アルト：永島 陽子



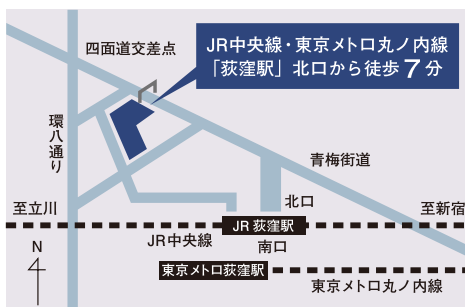
バス：塩入 功司



合唱：東京バロック・スコラーズ  
管弦楽：東京バロック・スコラーズ・アンサンブル

三澤洋史のもとで「21世紀のバッハ」を追おうという志を共有する合唱団と管弦楽団。合唱団はオーディションによって選ばれたアマチュア、アンサンブルは一流のプロ奏者からなる。演奏のみならず、公開レッスンや講演会など、多角的な活動を行っている。また、バッハを愛好する個人や団体とのネットワークを広げ、バッハ探求のセンターとなることを目指している。

杉並公会堂  
Suginami Koukaidou



〒167-0043 東京都杉並区上荻 1-23-15 TEL 03-3220-0401

国立オリンピック記念  
青少年総合センター  
国際交流棟 国際会議室

